残された形見

二階堂　進

昭和五十五年八月末、私は大統領選挙のことや米国の要人に会うためにワシントン、ニューヨークを訪ねました。

その際に元国務長官・キッシンジャー博士に会い、内外の諸問題や日米関係について意見を交しました。氏は会談の初めに故大平首相のことにふれ、「まことに惜しい指導者をうしなった」と丁重なる弔意を表されました。さらに、大平首相は氏の最も尊敬し信頼していた力強い指導者であったこと、また日本での葬儀にはアメリカの大統領はぜひ出席すべきであると、人を介してカーター大統領に要請されたことなど打ち明けられました。

私は、日本の国民も特にカーター大統領の葬儀参列には深く感銘いたしましたと、心からお礼を申し上げました。博士の話を他界された故人に聞かせてあげたい思いでいっぱいでした。

昭和四十七年九月、当時田中内閣で外相の任にあった故大平首相は、田中総理とともに日中両国の正常化を決断され北京を訪問されました。私も随行を拝命し、約一週間というもの大平外相のなみなみならぬご苦労をみてまいりました。

日中両国首脳の数回にわたる厳しい会談をうけて、歴史的共同声明をまとめるための作業は深夜に及び、徹夜もありました。また万里の長城見学の際は姫外相と車に同乗され、長い車中を辛抱強く会談に努められていたご苦労の数々は、いつまでも忘れることのできないものであります。

共同声明調印の行われる朝、大平外相は赤い目をされて田中総理の部屋を訪ねられました。二人はお互いに苦労をねぎらい、歓談された後、お互いに筆を執られ、あふれんばかりの感懐を自作の詩に託されました。北京はその日、世界の果てまで届くような青空が広がり、穏やかな秋景色でした。

長城延々六千里
汲尽蒼生苦汗泉
始皇堅信城内泰
不知抵抗在民心
山容城壁黙不語
栄枯盛衰凡如夢

一九七二、九、二九日
共同声明発表の日
北京迎賓館
大平正芳作

この自筆の詩は、私に残された故人の形見になりました。大事に保存していくつもりです。

世界の指導者からも、国民からも、限りなく惜しまれ、親しまれた大平さんのご冥福を心からお祈りいたします。

（衆議院議員・自由民主党総務会長）